

東京2020大会でのレガシー創出 〜ダイバーシティ&インクルージョン〜

東京2020大会がレガシーを見据えて特に力を入れているのが、D&I(ダイバーシティ&インクルージョン)※です。反差別や人権といった考えを基本とし、ジェンダーの平等、LGBT(性的マイノリティ)への理解推進、障害の有無や国籍の違いなどを超えたアクセシビリティの確保(誰もが円滑に施設やサービスを利用できること)などに取り組んでいます。

※Dはダイバーシティ(多様性)、Iはインクルージョン(包摂)。性差や国籍の違い、障害の有無などを超えて多様な人材を受け入れ、違いを尊重していくこと。

アクセシビリティ・ガイドライン

東京2020大会に向け、公益財団法人オリリンピック・パラリンピック競技大会組織委員会は、2017年3月、障害の有無に関わらず、すべての人々が参加しやすい東京2020大会を実現するため『Tokyo 2020アクセシビリティ・ガイドライン』を策定しました。

ガイドラインは、障害者や高齢者に加え、東京都を訪れる外国人旅行者も対象に含みます。スロープやトイレなどのハード面のみでなく、言語サービスを行う際のやり方や言語表現などのソフト面も記載されています。

また、組織委員会による情報発信・表示サインや、バリアフリー基準及び接遇トレーニングなどに活用する指針も述べています。

皆さんのなかで、例えば、交通機関での変化に気づいた方も多いのではないのでしょうか？

私たちにできること

私の声かけで、
東京をおもてなしの街にする。

発行/東京都



外国人旅行者や高齢者・障害者等が安心して観光を楽しめるよう、道案内や手助けをするために必要な基礎知識と、状況に応じた対応例などをまとめたポケットガイドです。

東京メトロは、東京2020大会に向けた取り組みとして、エレベーターの整備やトイレの洋式化・多機能トイレの整備、駅の表示が英語や多言語対応になったことを、ホームページで紹介しています。私達人間にも、できることはあります。配慮が必要な人に、どう手助けや声かけをしたらよいか、改めて確認するのも良いのではないのでしょうか。(栗山)

パラリンピックの価値と歴史

パラリンピックの語源は、パラ(ジャ(下半身麻痺))とオリリンピックの造語でした。のちに、パラレル(並行)とオリリンピックを合わせて「もうひとつのオリリンピック」として再解釈されています。

東京2020大会の開催に向け、パラリンピック関連の話題をメディアで見られる機会も増えました。様々な障害をもつ選手が参加するため課題も多く、競技ごとのクラス分け基準も検討が続いています。

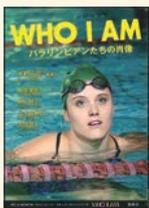
パラリンピックは、障害をもつ選手達が、個性や能力を発揮して活躍できる公正な機会が与えられている場です。障害を乗り越えて果敢に挑戦する姿は、見る人に勇気を与えます。

東京2020大会は、障害者や健常者が互いに人格と個性を尊重し、共に支え合う「共生社会」や「多様性」についてあらたに考える、貴重な機会になるのではないのでしょうか。(栗山)

WHO I AM

パラリンピアンたちの肖像

木村元彦編著 / 大泉実成・黒川祥子・八木由希乃・吉田直人著 / 集英社



WOWOWパラリンピック・ドキュメンタリーシリーズの書籍化。内戦で足を失った選手や、宗教上の制約がある国に生まれた女性選手など、アスリートの背景や生きざまに迫ります。「これが自分だ」と言い切る彼らの強さに、パラリンピックの奥深さを感じる一冊です。

2020年	2016年	2000年	1985年	1964年	1960年	1948年	1944年
東京2020大会の開催予定。22競技史上最多の4400人が参加予定。	リオ2016大会でパラリンピック陸上・走り幅跳びのマルクス・レーム選手がオリリンピックの記録を上回る。	IOCとIPCの間で、「オリリンピック開催国は、オリリンピック終了後、引き続きパラリンピックを開催しなければならぬ」と合意。	国際オリンピック委員会(IOC)は国際調整委員会(ICC)がオリリンピック年に開催する国際身体障害者スポーツ大会を「Paralympics(パラリンピックス)」と名乗ることに同意。	東京オリリンピックと同年にパラリンピックが開催。	オリリンピックのローマ大会で開催された国際ストック・マンデビル車いす競技大会を国際パラリンピック委員会(IPC)は第1回パラリンピックと後年に認定。	ロンドンオリリンピックと時を同じく、車いす患者のアーチエリー大会を開催。パラリンピックの原点となる。	イギリスの病院で、戦争で負傷した兵士のリハビリにスポーツを導入。

★今号に掲載した本は、アイレックで借りることができます。



酒井 今回の特集に取り組みながら「多様性」や「人権」といった内容は、個人的にも深く掘り下げていきたいテーマだと感じました。自分の関心のあるテーマが何かを知ることができた貴重な数か月でした。